資料2－①

『戦国策』（福田襄之介、森熊男『新釈漢文大系　第49巻　戦国策（下）』明治書院、1988より引用）

燕の昭王は、斉に報いようと思った。そこで郭隗に尋ねた。郭隗は答えて言った、「帝なる者は師と生活を共にし、王者たる者は友と生活を共にし、覇者たる者は臣と生活を共にし、国を滅ぼす者は僕役と生活を共にします。自らの驕りや誇りを捨ててさえ仕え、自ら北面して臣下の礼をとって教えを受ければ、自分に百倍する（才能を持った）人物がやって来ます。相手を敬って自分がこばしりする礼をとり、その人より後に休息し、まず質問して後は黙って（教えに）聞き入るようにすれば、己に十倍する（才能を持った）人物がやって来ます。相手が小走りする礼をすれば、こちらもそれをするような場合には、自分に匹敵するような人がやって来ます。脇息によりかかり杖によりかかったり、流し目で見たり指さして使ったりする場合には、雑役をする人がやって来ます。もし怒りをこめてにらみつけたり打ちつけたり、大声あげてしかりつけたりする場合は、徒隷となるような人がやって来ます。これが、いにしえ、道理を踏まえて賢人を招聘するに用いられた方法です。王が真に、広く国じゅうの優れた人を選んで、その門を尋ねて行かれれば、天下に、王が賢臣をその家にまで尋ね訪れられるという評判がたち、天下の優れた人物たちは、燕に馳せ参って来るに違いありません」と。昭王が聞いた、「私は、いったい、だれを訪問すればよろしいでしょうか」と。

郭隗は言った。「私は次のような話を聞いたことがあります。いにしえ、ある君主で、千金を出しても一日千里を踏破するといわれる名馬を手に入れたいと願った人がいました。しかし、三年たっても名馬を手に入れることはできませんでした。すると、宮中の小間使が君主に、『買い求めてまいりましょう』と申し出た。君主は彼を買いに出させました。三か月して、彼は千里の馬を見出しましたが、その時には、馬は死んでいました。そこで、彼はその死んだ名馬の首を五百金で買って帰り、君主に報告いたしました。君主はひどく怒り、『わしが欲しかったのは、生きている馬だ。どうして死んだ馬などにかかわって、五百金を捨てて来たんだ』と言いますと、小間使いはこのようにお答えしたのです。『（名馬であるなら）死んだ馬でさえ五百金で買って下さる。これが生きている馬となったら大変なことだ。天下の人々は、王が馬の値打ちが分かるお方で、その値で買ってもらえると思うに違いありません。（千里の）馬はたちどころにやって参りましょう』と。そうこうして、一年もせぬうちに、千里の馬が三頭もやって来た、というのです。今もし、王が本当に優れた人物を招きたいとお望みであれば、まずこの私、隗を招いてくださることからお始めになってください。隗のような者でさえ仕えさせていただけるのです。ましてや隗より優れた人物であればなおさらのこと。どうして千里の道のりを遠いなどと思いましょうか」と。そこで、昭王は郭隗のために宮殿を築いて、これを師と仰ぎ仕えた。

『史記』燕世家（吉田賢抗『新釈漢文大系　第85巻　史記5（世家上）』明治書院、1977より引用）

燕の昭王は燕が破滅した後で王位につき、身を卑く持し、幣物を厚くして賢者を招いた。郭隗は言った。「王がどうしても賢士を招きたいとおぼしめすなら、まず隗を厚遇することから始めてください。そうすれば、隗より賢明なものが、なんで千里を遠いとして来ないでおりましょうや、きっと馳せ参じましょう」と。そこで昭王はあらためて隗のために邸宅を新築し、隗にうやうやしく師事した。

※指導の都合上、ルビと訳を一部改めた

資料2－②

「先従隗始」授業プリント②

組　番　名前

3『十八史略』『戦国策』『史記』の「先従隗始」を読み比べる

『十八史略』

・それまでの十八の歴史書から話を抜粋し、簡単に中国の歴史をまとめた書物

①昭王が賢者を燕の国に招こうとした

②郭隗のたとえ話

→死馬を五百両で買えば生きた千里の馬は必ず手に入る

③郭隗の提案

→まず郭隗から始めるべき

④昭王は郭隗のために邸宅を築いて郭隗を厚遇した

『戦国策』

・戦国時代に活躍した人々の記録

①昭王が賢者を招こうと郭隗に相談する

②郭隗はまず（　　）方法を説く

→郭隗が例にあげる五種類の人物の例を抜き出す

（　　）（　　）

（　　）（　　）

（　　）

③たとえ話

（　　）を五百金で買えば、生きた千里の馬は必ず手に入る

④郭隗の提案

（　　）べき

⑤昭王は郭隗のために（　　）を築き、厚遇した

『史記』　燕世家

・歴史書『史記』の中の「世家」の部分に書かれている

・世家とは・・・（　　）

①昭王が賢者を招こうと郭隗に相談する

②郭隗の提案

（　　）べき

③昭王は郭隗のために（　　）を築き、厚遇した

資料2-③

◎『十八史略』と比較して話の構成がそれぞれどのように異なっているか。

『戦国策』

・

『史記』

・

4 どうして『史記』と『戦国策』は話の構成が異なっているのか考察する

○次の【資料1】～【資料2】を読み、『戦国策』『史記』の話の構成が異なっているのかを考察する。

【資料1】『戦国策』に関する資料

・前漢の劉向（前七七～前六）が、河平三年（前二六）に成帝の勅命により、天子の書庫、秘府の典籍の整理・校訂に当たった際、これらの原資料に対して、「戦国の時の游士、用ひらるる所の国を輔けて、之が為に策謀す、宜しく戦国策と為すべし」と、命名したのに始まっている。

・本書（『戦国策』）は、戦国遊説の士の策謀の記録であるが、原作者が複数であることは、原資料の名称が六種に及んでいることからも、推定されるところであるが、原作者が何人であるかは、もちろん知る由もない。

（福田襄之介、森熊男『新釈漢文大系　第49巻　戦国策（下）』明治書院、1988より引用）

問1　『戦国策』は誰が主役として書かれている書物か。【資料1】中の根拠となる部分に線を引き、まとめる。

【資料1】に（　　）とあるから、『戦国策』の「先づ隗より始めよ」では（　　）が主役として書かれていると考えられる。

問2　問1を根拠として、『戦国策』における「先づ隗より始めよ」の構成の特徴をまとめる。（例：『戦国策』は～書物であるから、～構成になっている。）

資料2-④

【資料2】『史記』に関する資料

・世家は割拠政権たる封建諸侯の記録であり、帝王によって領地を与えられ、領内の統治を委任された世襲の大名家の盛衰興亡を記す。中国は土地が広く人民が多いので、中央の統一政権たる帝王と、一般人民との間に必然的に中間的な統治機構が発生しやすく、それが世襲的になるから、これを世家と称するのである。

（宮崎市定『史記を語る』岩波書店、1996より引用）

問1　『史記』の「世家」は誰が主役として書かれている書物か。【資料2】中の根拠となる部分に線を引き、まとめる。

【資料2】に（　　）とあるから、『史記』の「先づ隗より始めよ」では（　　）が主役として書かれていると考えられる。

問2　問1をふまえて、『史記』における「先づ隗より始めよ」の構成の特徴を根拠と結論の形でまとめる。（例：『史記』は～書物であるから、～構成になっている。）

◎問2の内容をお互いに説明する

5 単元のまとめ